

2015年度
修士学位請求論文要旨

日本語学習者の配慮表現
—授受表現と受身表現—

国際日本学研究科 国際日本学専攻
日本語学・日本語教育学研究領域

本稿は、配慮の観点から、日本語学習者の授受表現と迷惑受身表現を研究するものである。配慮表現では、姫野(2005)「相手との人間関係を維持・発展させるために用いられる。敬語、および敬語を使わずに配慮を表す表現」などの定義があるが、本稿では「相手との対人関係を円滑にするために使用される表現」と定義づけた。姫野(2005)は、配慮が必要な項目に、「潜在的競合型」を挙げており、述べ立てや質問も競合型になりうるとしているが、述べ立てや質問における配慮の研究はまだ少ないように思える。

本稿では、姫野(2005)などの先行研究を踏まえ、配慮表現における授受表現と迷惑受身に焦点を当て研究を行った。

授受表現には、与益表現と受益表現があるが、与益は述べてはならず、受益は述べるべきという配慮の原則がある。迷惑受身では、相手から受けた迷惑は表出しないほうが配慮的だという原則がある。これらは、間違えると相手に不快な印象を与え、自分の評価にも関わってくるが、学習者はこれらの間違いに気づきにくく、自身の知らない間に人間関係に支障をきたしている可能性がある。これらの問題を解決し、学習者が円滑な人間関係を築けるよう、本稿では、日本語学習者による授受・受身表現とその認識、教科書分析、今後の指導法について研究を行い、今後の配慮表現教育、日本語教育へと結び付けていく。

本稿における研究手法は、上述の通り学習者と日本語母語話者の表現・意識についてのアンケート調査と、教科書分析である。

アンケート調査では、受身表現と授受表現について日本語母語話者 57 名と日本語学習者 66 名を対象に、選択式アンケート 12 問と記述式アンケート 14 問の合計 26 問のアンケートを実施した。選択式、記述式ともに与益場面、受益場面、迷惑場面、または迷惑・中立の場面を設定した。

選択式のアンケートでは、与えられた場面での各選択肢の適切性判断を行い、記述式アンケートでは、各場面に自分が置かれたとき、どのような表現を使うか、指定された動詞、問題によっては、助詞も含めて記述するように求め回答の分析を行った。

教科書分析では、「みんなの日本語」、「新編日語」、「げんき」を対象に、授受表現と受身表現の文法解説がどのようにされているのか、どのような練習が行われているのかを調査し、評価すべき点、改善すべき点を記述した。

予想される結果として、与益場面では学習者に与益表現が表出すること、与益表現の適切性判断も学習者は高くなることなどを予測した。受益場面では、受益表現はよく習得されているという結果がでるのではないかと考え、迷惑場面では、学習者は迷惑の受身を使用してしまうのではないかと予測した。また、場面にそぐわない文型使用により不適切ではないが、違和感を与える表現が出てくるのではないかと、聞き手が友人の場合、感謝を述べないなどぞんざいな表現もでてくると考えた。

選択式アンケートと記述式アンケートの結果として、与益表現では、母語話者よりも学習者は与益表現の使用を適切だと認識しており、特に敬語使用の相手に対して使用することを適切だと判断していることがわかった。記述式の結果では、母語話者よりも与益表現の使用が多く、特に友人に対しての使用が多く見られたこと、申し出場面の方が、依頼場面よりも与益表現が現れやすかったということがあげられた。

受益場面では、選択式アンケートの適切性判断では、学習者は母語話者と同様に、適切性を高く判断していたが、ほとんどの回答で有意差が見られた点と、迷惑場面の受益使用では、学習者は母語話者ほど適切だとは判断していなかった点があげられた。記述式では、敬語使用の相手では、母語話者と同程度受益表現を使用しており、特に、依頼場面では受益の使用が高いことがわかった。しかし、迷惑場面での受益使用は、母語話者よりも使用率が低いことがわかった。

迷惑受身では、選択式アンケートでは母語話者ほど迷惑受身を不適切だとは判断していなかったこと、記述式では迷惑受身の表出は少なかったが、原因を明示した表現を使用していることがわかった。

上述のように、学習者が配慮的な表現や認識の習得が不十分であることに教科書の問題を指摘し、教科書の分析を行った。ここでは、「みんなの日本語」、「げんき」、「新編日活」の3冊の教科書における「授受表現」、「受身表現」に焦点を当てて研究を進めた。

授受の課では、与益表現の問題に、与益表現は丁寧体を使用する相手には使用できないことや、与益表現の使用ができる場面についての言及がないことに加え、与益を述べない練習と、与益表現を使用できる状況を認識させる練習が不足していることがあげた。

受益表現では、相手が目の前にいるときには述べた方が配慮的であること、受益を述べない文と述べている文の印象の違いについては言及されておらず、練習問題では、相手が目の前にいるときに受益を述べる練習、受益表現を使用している文と、受益表現を使用していない文の適切性を理解させる練習問題がないことがあげられる。

上述のアンケート結果と教科書分析を基に教材への提言として、教科書の説明文についての言及と練習問題の作成を行った。

説明文では、「与益表現は、丁寧体使用の相手には使用できない」、「受益表現を使用しない場合とする場合では与える印象が違う」、「迷惑受身は、目の前の相手には使用できない」などの配慮的な記述を増やすことを提案した。

練習問題では、先生に対する発話で「①手伝ってさしあげましょうか ②お手伝いしましょうか」という選択肢から、どちらが適切かを選ばせるような絵や文から与えられた発話が配慮的に適切かどうかを判断する問題と、自分で配慮的な発話を産出する問題を提案した。

本稿では、日本語学習者の配慮への意識や表現について、母語話者と比較しながら明らかにすることが出来た。その結果をもとに、教科書の原因を探り教材への提言に結び付けられてことで、日本語教育や配慮表現教育に役立てたと考える。今後、日本語教育研究において配慮表現研究が盛んに行われ、学習者が配慮について考え円滑な人間関係を自ら構築できるようになることを期待する。
